



風景物語り 風景の数量的評価と関連

| | |
|-----|---|
| 著者 | 長谷部 正 |
| 雑誌名 | 農業経済研究報告 |
| 巻 | 51 |
| ページ | 75-86 |
| 発行年 | 2020-02-29 |
| URL | http://hdl.handle.net/10097/00127888 |

風景物語り

—風景の数量的評価と関連—

長 谷 部 正*

目 次

- | | |
|-----------------------|---------------------|
| 1. はじめに | 5. 価値形態論とアスペクト論との関連 |
| 2. 物語りによる風景の認識と解釈 | —対象の内的関係— |
| 1) 風景の意味 | 1) 単純な価値形態の論理 |
| 2) 風景物語り | 2) 価値形態論とアスペクト論の類似 |
| 3. 風景の見方の変化—アスペクトの観点— | 6. 物語り論の数量的評価への適用 |
| 4. 風景の数量的評価—風景の商品化— | —貨幣の役割— |

1. はじめに

長谷部（2019）では、農業経済理論の新たな展開の一つの可能性として物語り論的な分析枠組み（Narrative approach）の導入についてふれた。そこで筆者自身の既往研究の概略についての説明でも述べたが、長谷部・木谷・野村（2003）及び長谷部（2005）などでの考察以降、西田幾多郎の環境論（西田（2000））を風景論として読み替え、野家啓一の物語り（narrative）論（野家（2005））と結びつけて、「風景物語り」という分析枠組みを設定し、風景評価についての哲学的な基礎づけの試みをおこなってきた。しかし、木谷・長谷部・野村（1999）や長谷部・木谷・野村（2002）などの実証分析における風景評価の具体的な手法としては仮想評価法（Contingent Valuation Method：CVM）やコンジョイント法（Conjoint Method）を用いるのみで、物語り論による風景評価の哲学的観点と経済理論を背景としたそれらの数量的な評価手法との関連についての考察は十分ではなかった。そこで、本稿では、風景評価を次節で述べるように日本では対象との一体感が強いととらえられる風景の価値づけとみなし、ルートウィッヒ・ウィトゲンシュタイン（以下 LW と略記）のアスペクト（aspect）論とマルクスの価値形態（value-form）論の両者の論理形式の検討等を通して、評価枠組みとしての風景物語りの哲学的及び経済学的な性格を明らかにし、両者を関連づけることを意図している。なお、本稿の議論に先立ち長谷部（2012）では、経済学と哲学とを総合的に考察しうる視点の確保について価値形態論を手がかりにして論じているが、以下でも同じ発想で議論を進める（注1）。ただし、そこでは、本稿で目的としている風景物語りによる風景評価の問題と経済理論との関連性については考慮していなかった。それで、長谷部（2012）の考察において参照した塩沢由典の単純な価値形態の解釈（塩沢（1983））も併せて改めて検討する。

ところで、風景評価にあたっては、風景の見え方やその変化が重要である。この点に関して、第3節で述べるウィトゲンシュタイン（1991）のアスペクトの議論が示唆に富む。野家啓一に

*（株）啓程塾（東北大学名誉教授）

よるアスペクトの論究（野家（1993））を参考にすれば、LW が論ずるアスペクト知覚は対象に潜む「内的関係」を見いだすものである。一方、第5節で述べるマルクスの価値形態論は、商品の価値を形態同士の関係によって表現するという論理形式を持っている。これらの点をふまえて、本稿ではアスペクト論と価値形態論との論理形式の類似性を考察し（注2）、かつ、交換における貨幣の役割に着目し、長谷部・木谷・野村（2003）及び長谷部（2005）などで述べた風景物語りと数量的な風景評価との関連について、新たに検討して、物語り論的な分析枠組みについて補足する。

議論の進め方は、次の通りである。第2節で、西田幾多郎の主客合一の論理と野家啓一の物語り論をもとに風景評価の分析枠組みを設定し、それに基づく風景の認識と解釈について論ずる。第3節では、風景の見方の変化は、アスペクト転換（あるいはゲシュタルト転換）によるものであることを論ずる。また、野矢茂樹によれば、個々人はそれぞれ異なったアスペクト（あるいはゲシュタルト）を持ち、アスペクト転換（あるいはゲシュタルト転換）の体験も個人ごとに異なると述べていて、「他人理解」の難問に対する一つの解答足り得ることを示している。これは、同じ風景を目の前にしても他者と私とでは風景の評価が異なることであり、本稿の分析枠組みで言い換えるならばそれぞれが異なった風景物語りを語ることを意味する。第4節では、パソコンを活用した風景に関する仮想評価法の適用を例示し、本来市場が存在しない風景が価格表示されることを説明する。第5節では、最初に、マルクスの単純な価値形態に関する議論の特徴を塩沢由典の解釈に依り明らかにする。次に、『資本論』における単純な価値形態についてのマルクスの定式である「20 エレのリンネル＝1 着の上着」が、同値関係を表すか否かについて、ウィトゲンシュタインの私的言語問題の解釈において人称の非対称性に着目する鬼界彰夫の独自の観点に基づいて検討する。これは長谷部（2012）で考察されていなかった点である。その後で、アスペクト論が価値形態論と同じく関係性を問題にしていることに焦点をあてて両者の論理形式の類似性について考察する。第6節では、物語り的な分析枠組みを仮想評価法のような数量的な手法による風景評価に適用することの意味について貨幣の役割とも関連づけて議論したうえで、最後に本稿をまとめる。

2. 物語りによる風景の認識と解釈

1) 風景の意味

日本語の風景は、他に風情、情景、景色、光景の言葉にもあるように、心、風、光、色などの感覚に関わり、多様性を持つものとしてとらえられている（注3）。これに対して、西欧で風景を表す言葉は、たとえば英語では landscape であるが、land は土地や地域を意味し、また、客観的な眺め（景観）を示している。西欧と比して日本には対象との一体感が強い風景のとらえ方をする長い歴史がある。

2) 風景物語り

長谷部（2005）では、野家啓一の物語り論（野家（2005））に依拠して、物語りの概念を用いた風景評価の枠組みについて論じた（注4）。他の研究対象とは異なり対象との一体感が強

く五感によってこそよく理解できる風景を分析するために、主客合一を論理展開の基本とする西田幾多郎に学び、かつ、野家啓一の物語り論に依拠した風景の「物語り」という概念を導入することにより、農村等の風景評価に関する新たな分析枠組みが示される。

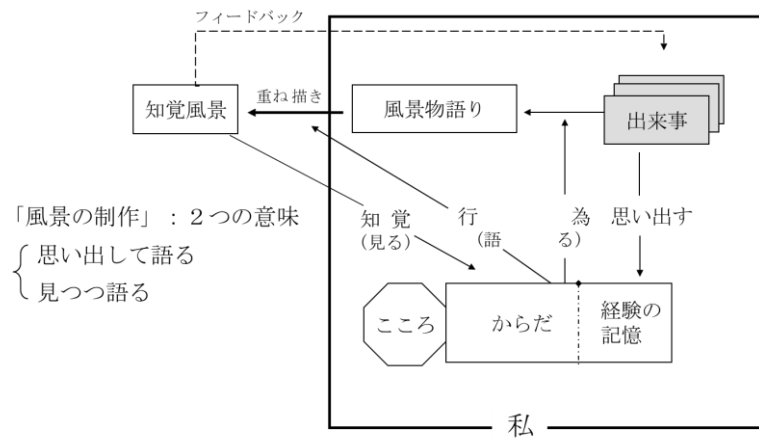
ここで、農村風景を念頭において議論する理由を簡単に説明しておく。西欧近代における風景画の成立が、方法としての遠近法の確立を前提としていることに示されるように、風景の発見は、主客分離の西欧近代的認識論の成立と期を一にしている。このような意味で、西欧近代成立以降において、風景はわれわれの認識の仕方を把握するための一つの指標である。しかも、農村における囲い込み等によって都市に脱出せざるをえなかった人々が、都市において自立した個人（近代的自我）として農村を見る視点こそ、風景（あるいは風景画）の始まりであった。したがって、風景の中でもとりわけ農村風景こそ西欧近代的な認識論を検討する際の重要な指標たりうる。

西田幾多郎が主張するように環境が人間を作り、人間が環境を作るという場合、普遍的なものの（一般者）としてとらえられる環境が、自らを否定して個物としての人間を生み出すのである（西田（2000））。また、個物としての人間が環境を作るとは、自らを否定して普遍としての環境を生み出すことである。風景も環境の一部であるとして、西田の主張を風景にも適用すれば、「風景が人間を作り、人間が風景を作る」となる。

野家（2005）によれば、物語りは過去の出来事の想起によって作られる。なお、野家は、単なるファクトと見なされる「物語」（story）と区別して、共同的な言語行為として生み出されるものを「物語り」（narrative）と表現している。ダント（2000）によると、物語文は、「はじめ」と「終わり」をつなぎ、経験を時間系列的に構造化する。このような議論を背景で支えているのは、大森荘蔵によって提案された想起過去説である（大森（1996））。この説では、過去は想起、つまり思い出して「ああだった、こうだった」という形で体験しうるものであるとみなしている。

さて、想起により今の風景と過去の風景をつなぐことは、風景を物語ることである（これを風景物語りと表す）。野家（2005）の物語り論を風景の問題に即して翻訳すると「風景に関わる出来事（体験）を文脈の中に配置し時間系列に並べて当事者が共有できる物語りとしての風景を語る」となる。

長谷部（2005）で述べたように西田幾多郎の主客合一の論理を基に設定された風景物語りでは、風景が多様性を持ち、かつ、私と一体化しているととらえられる。西田哲学における議論の重要なポイントは、世界が私を通して世界を見ると主張することである。大橋良介は、この点について見る方向の違いに着目した説明をおこなっている。それは、私から世界を見るのではなく、世界から世界を見る視点を提示した、というものである。近代的な知のあり方によれば、考えるということは、私が考えることであり、見るということは私が見ることである。この方向を逆転させれば、「私」を通して「世界」が考える」（大橋（1995）98）ことになる。この発想を風景に適用して「風景から見る」と表現した場合、それは、風景が私を通して風景を見ることを意味している。したがって、「風景から見る」に対応させると、「風景が語る」こ



第1図 風景物語りを語ること

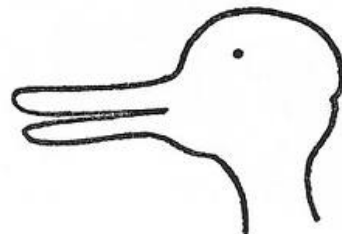
とは、「私が語る」ということを通して風景が風景を語ることでありと理解できる。ただし、分析的視点に立つと次に述べるように異なる。

風景は物語りとして作られるが、この物語りは、大森（1994）の表現を借りるなら現実の知覚風景に「重ね描き」される。大森は、重ね描きの働きについて、科学的な考察により引き出された理論（仮説）はそれ自体としての有効性はあるものの、さらに現実の知覚対象に重ねることにより日常生活により合致した世界像として把握しうることになる、と説明している。風景物語りも大森のいう理論（仮説）である。第1図に示したのは、第一に、身体における出来事の記憶を思い出しつつ風景の物語りを語り、第二に、対象である知覚風景を見つつ、それにすでに語られた風景物語りを重ね描きし、対象と整合性のとれた物語りとして語ることであり（注5）。なお、第1図は、私が語ることを想定した限定的なものである。

野家（2005）は、語ることによって、私的な体験が公共的な経験となり、蓄積される知識になると述べる。こうして風景物語りは、解釈しなおされながら共に語り合われ、また、語り継がれることによって、生活の中に定着し規範となる。このように風景物語りが認知され、解釈するための規則が広くいきなり規範となっている場合、本稿では「規範風景物語り」と呼ぶ。

3. 風景の見方の変化—アスペクトの観点—

第1図に示されるように風景物語りを語ることにあって、風景の見方やその変化の把握が重要であり、この点についてはLWのアスペクト論が参考になる。アスペクトは、あるものの見えを示すだけでなく、あるものをどのようにとらえるか（判断するか）という見方をも示す概念である。例えば、ウサギにもアヒルにも見ることができるというジャストロー図（第2図）に関



第2図 ジャストロー図

して、最初ウサギが見えていた状態（あるアスペクト）から気づくとアヒルに見える状態（他のアスペクト）へ変わっていたという変化はアスペクト転換と呼ばれている。野家啓一が指摘するように「アスペクト知覚とは対象に備わった「内的関係」を見て取ることにほかならない」（野家（1993）247）（注6）。ジャストロー図における内的関係は、ウサギとアヒルとの関係である。

ここまで、アスペクトの用語を用いたが、風景のようにあるまとまりをもったものを議論するには長谷部（2005）で説明したようにゲシュタルトという言葉の方が適切なので、次にこれを用いて論ずる。

例えば、旅行で農村を訪れた人が、初夏の稲が育ち緑一面の田んぼが連なる景色を目の前にして「この風景を見ると安らぐなあ」と言うのをある農村住民が聞いたとしよう。このことについて、ゲシュタルトの用語を用いて前述のアスペクト転換に関すると同様の説明ができる。常日ごろ何気なく見ていた眼前の風景が、「安らぎ」の効果（価値）を持つことに気づいた農村住民にとっては、それまでの漫然と「農村風景が見える」状態（あるゲシュタルト）から、「（安らぎの価値を持つ）農村風景に見える」状態（他のゲシュタルト）へとゲシュタルト転換が起こったととらえることができる。農村住民と彼にとって他者である旅行者とでは風景の見方が異なるというここでの議論は、野矢茂樹が考察している「他者理解の難問」（田島（2012）358）に関わる。野矢の考察については、田島正樹の次の簡潔な解説がある。

「（略）他者の他者たるゆえんは、その頭の中を覗き込むことができないとか、彼自身の歯痛を私が感じるができないといった点にあるわけではなく、同じ現象を違った連関のもとに捉え、違った意味を読み取るといった点にこそある、というわけだ。同じ風景を見ても、それに対する関心も理解も違う。それが他者というものだ。」（田島（2012）358）

これについてゲシュタルトを用いて言い換えれば、自分がゲシュタルト転換の経験することによって他の多様なゲシュタルト転換へ思い至ることこそが他者の理解となる。これはまた、私と他者とは、同じ風景を見ても異なった物語りを語ることを意味する。

第1図を参照すれば、知覚風景の見え方が変化したり、忘れていた農村に関する体験（出来事）を思い出したりすることによってゲシュタルト転換が起こり、風景物語りを語る契機となる。それに伴い風景に対する評価がおこなわれたり、あるいは以前とは異なる評価がなされる場合も生ずる。しかも、人それぞれ「同じ風景を見ても、それに対する関心も理解も違う」（田島（2012）358）ので、風景に対する評価には個人差がある。

4. 風景の数量的評価—風景の商品化—

本節では、数量的な手法による農村風景評価の具体例について、パーソナル・コンピュータ（PC）が調査者に代わって自動的に農村風景評価のアンケート調査をおこなうPCナビゲート型調査システム（以下PC調査システムと呼ぶ）を念頭において説明する（注7）。PC調査システムにおいて、研究者は、住民が語る農村風景の物語りをもとに、調査のための物語り（PC物語と表記）を語る。そして、PC上に写真を用いて作成された農村風景画像とナレーションによる

PC 物語に依拠して被験者が農村風景に関する評価をおこなう。このとき被験者は、写真画像とナレーションに加え、自分の農村経験に基づき被験者の物語り（被験者物語と表記）を語り、評価していると考えられる。仮に、最初的评价を終えた後に、農村風景に関する情報、例えば写真画像を提供され経験の意味が変化すると、新たな文脈のもとに被験者物語は修正され、被験者は、その修正された被験者物語によって農村風景を再評価する。PC 調査システムではこれを確認するため、農村風景の写真画像セットの提示により被験者の風景イメージの修正（ゲシュタルト転換）を確認する操作を挟み、次の仮想評価法（CVM）を二度実施している。

通常の商品のように市場を通じて価格付けされることがない農村風景について、それをいかにして評価するかが課題である。これに答えるものとして、特定の状況を設定して当該風景の維持・保全等に対していくら払う意志があるか（WTP：Willingness to Pay）を問い、かつ、その要因を分析できる CVM がある。この CVM の分析は、本来市場が存在しないものについての取引を仮想的に想定する点に特徴がある。

野村・木谷・長谷部（2001）で詳細を示した PC 調査システムでは、各調査者が被験者への聞き取り調査を実施する質問紙調査とは異なり、PC を利用しておこなわれるため情報環境が統一され、音声と画面上の説明に基づいて調査が最後まで到達するように設計されている。

CVM では、1994 年に「第 1 回美しい日本のむら景観コンテスト」で最優秀賞（農林水産大臣賞）を受賞した山形県飯豊町の農村風景について生産調整や後継者不足による耕作放棄等で風景が荒廃するのを防ぐため景観維持基金を設けたが、その基金の維持が困難になったので、被験者が基金継続に貢献するために必要とされる金額への支払意志を回答させる仮想的状況を設定した。日韓学生を対象とした調査の分析結果によると、WTP は日本人学生の場合 1 人月 500 円弱で、為替レートで換算した韓国人学生の場合もほぼ同額であった（注 8）。このように CVM で評価された農村風景は「価格表示された風景」として表される。

5. 価値形態論とアスペクト論との関連—対象の内的関係—

1) 単純な価値形態の論理

本節では、マルクスの『資本論』における単純な価値形態の議論の論理形式を論じ、アスペクト論のそれと比較する。

20 エレのリンネルが 1 着の上着と交換されることを、マルクスによる定式である

20 エレのリンネル＝1 着の上着

と表すとき、左辺の 20 エレのリンネルは相対的価値形態と言われ、右辺の 1 着の上着は使用価値であると共に、20 エレのリンネルと交換しうる価値（交換価値）を表すものとして等価形態と言われる（マルクス（2009）94-95）。

ここで、塩沢由典の議論を参考にして、先のマルクスの定式を単純化して

$A=B$

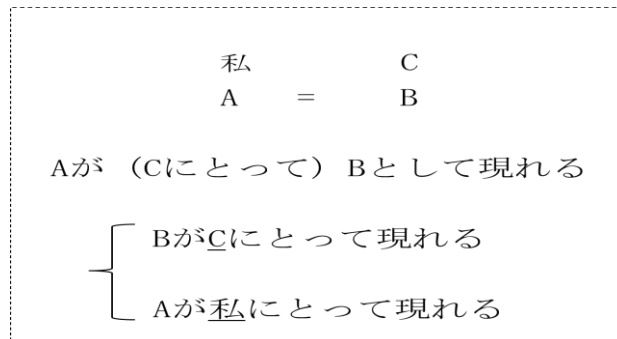
と置き換えて、この解釈のあり方を本稿に即して検討してみる（塩沢（1983））。この定式はそのままでは「A が B として現われる」ことであるが、塩沢は A を交換する相手を C として「A

がCにとってBとして現れる」現象であると述べる（注9）。Bを対象とするのがCであるのに対して、仮にAを知る（Aについて判断する）のが私であるならば、「BがCにとって現われる」に対応させ、「Aが私にとって現われる」ことになる。このように設定すると、AとBとの商品間の関係の背後に私とCとの人間関係のあることがわかる（第3図）。

次に、考察しなければならないのは、私とCの関係である。ここで着目したいのは、鬼界彰夫による（本稿と関連づけた表現をするならば）私とCとが人称に関して非対称な関係であるという議論である。鬼界の説明の核心は、私とCとで「人称間が非対称であり、かつ、それが結びついてはじめて、痛みとか感覚とか思考とか、心に関する概念が得られる」（鬼界（2011）16 上下）という点にある。これは、例えば私の「痛み」が私にしかわからない（私的言語しかない）とすれば、日常的に人々が「痛み」という言葉を用いている事態が説明できないというLWが論じた私的言語の問題に関わる。独自の解釈からこの問題の一解決案を提示しようとする鬼界は、次のように説明する。

「（略）人間の心に関する、感覚や感情、意志、思考に関する概念はすべて人称複合的だということです。いずれの概念も私にだけにあてはまるのではなく、私とあなたと、彼や彼女にあてはまり、しかもそれぞれ使い方がちがって、それがどう相関しているかを私たちはあらかじめ知っています。ですから、人が何を考えているのか、自分が考えているときと人が考えているとき、明らかにその状態はちがうわけですが、それをひとつの概念のもとで結びつける。」（鬼界（2011）19 上）

鬼界の説明についてある事象の状態に対する「判断」を念頭におき考えてみよう。私とCとの例であれば、私は私自身がAについて判断しているだけでなく、私と異なる「あの人」であるCがBについて判断していることもわかる。また、Cに即しても同様のことが言える。このように私とCがそれぞれ自分自身の判断だけでなく相手の判断についてもわかることは、私とCが互いの関係を理解していることでもある。換言すれば、私はCを「あの人」と呼ぶように、私とCとは異なる人称であること（人称の非対称性）を分かりつつ、「判断」という概念のもとにお互いを結びつけている。



第3図 商品関係と人間関係

ここで、マルクスの単純な価値形態の定式である「 $A=B$ 」の性格について検討する。この定式は、 A と B とが同値関係であることを示すものではなく、商品の価値に着目すると交換が成立して B が A と等価であることを示すマルクスの独創的な理論の簡潔な表現である（注10）。

「 $A=B$ 」の定式が同値関係でないのは、等号関係を逆転しても A が相対的価値形態で B が等価形態であることの入替えはできないからである。ところで、市場社会において私と C とは人格として同等な（対称な）関係として交換に参加している。ただし、既述の鬼界の考察をふまえるならば、市場社会において交換が成立したとしても、私と C とは人称的には非対称な関係にある。これが示唆するのは、「 $A=B$ 」の定式が同値関係を示すものでないことを人間関係の側から照射するものであるという点である。この点について、長谷部（2012）では考察していなかった。

これまでの単純な価値形態についての議論によれば、価値形態の特質を明確にするには「 $A=B$ 」の定式について「 A が C にとって B として現れる」現象であると説明するだけでなく、 A と B との関係に対応する私と C との同等な（対称な）人格関係及び非対称な人称関係について配慮することが有効である。

2) 価値形態論とアスペクト論の類似

マルクスの単純な価値形態論をLWのアスペクト論と対応させてみよう。「 $A=B$ 」の定式は、単に（使用価値である） B が C にとって現れる状態（あるアスペクト）から、「 A の価値を表す」 B として現れる状態（他のアスペクト）に変化、つまりアスペクトが転換したことを示すものである。このように、マルクスの単純な価値形態の議論は、論理形式においてLWのアスペクト論と類似性があり、そこに野家（1993）が説明している対象に備わった「内的関係」、本稿との関連で表現すれば、 B における使用価値と価値（交換価値）の関係が見られる。

6. 物語り論の数量的評価への適用—貨幣の役割—

第4節では、仮想的状況の下での交換を想定した風景評価のPC調査システムとその適用例を説明した。そこでは、風景は価格表示されるものとして扱われた。これについて長谷部（2012）でも述べた塩沢由典による価値形態の背景に関する考察を参考に検討する。

塩沢は、『資本論』の価値形態論を読み解く方法を提案している（塩沢（1983））。商品の形態が人間同士の関係に対応することを明示した上で、商品の形態の背後に、それらを生む観念体系があると述べる。そして、経済社会には二つの概念系列があり、一方は「（生産）価格、労賃、利潤、前貸資本、固定・流動、総資本、利潤率、競争」の系列Ⅰで、他方は「価値、労働力価値、剰余価値、労働、可変・不変、可変資本、剰余価値率、社会的必要」の系列Ⅱと整理している。塩沢は『資本論』が系列Ⅱに系列Ⅰを炙り出す役割を担わせたと説明する。

ここで、塩沢の二つの系列に関する議論を数量的な風景評価と結びつけるために、塩沢が説明する系列Ⅰや系列Ⅱに対置させて、交換が成立する以前の概念系列を「系列Ⅲ」として設定する。ただし、単純化のために系列Ⅲの内容を限定して系列Ⅰのうち「（生産）価格、労賃」のみと、系列Ⅱのうち「価値、労働力価値」のみとに対応させ、かつ、交換実現前を意味する概

念として〈価値〉，〈労働力価値〉と表記する（注 11）．取引が成立する以前の物のそれぞれの〈価値〉は，等価とはいえない．なお，価値形態論での議論の対象は，資本主義体制下の市場において交換成立を前提とした系列Ⅰ・Ⅱに対応する部分である．

交換成立以前の系列Ⅲに対応する人と人との関係は，長谷部（2012）で述べたごとく他者に無限責任を負う関係である．ところで，物が商品となり，物に対応する人間が市民に擬制される瞬間こそ，系列Ⅲが交換成立後の世界における系列Ⅱへと転換し，資本主義における市民社会が成立する契機である．これが交換成立における一方とすれば，他方は，市場での交換が具体化する系列Ⅰであり，取引される物と物とは商品として等価であると表されるのに対応するように人と人とは市民として相対する．ここでは，人と人との関係が物と物との関係として現れている．

以上をふまえて，第 3 節の初夏の水田が連なる風景の例を念頭におき，風景物語り論を第 4 節で述べた数量的な風景評価に適用する場合を想定する（ここでは私が農村住民であるとするとする）．

風景物語り論の枠組みは，第 2 節で述べたように西田幾多郎の主客合一の論理に依拠して設定されたものであり，多様性を持つ風景は私と一体となっていることが前提とされている．この場合，風景は交換成立前の系列Ⅲに対応する．西田の発想に従う風景物語りは「風景が語る」という性格を持つ（注 12）．しかし，風景物語り論が数量的な風景評価に適用されると，風景は仮想市場で交換される商品に擬せられ，系列Ⅲから系列Ⅱへの転換が生じる．これは，私にとっての風景は，何気なく見ていた眼前の風景から「安らぎの価値を持つ風景」といった客観的对象になると解釈できる（第 3 節で述べた風景におけるゲシュタルト転換）．このため風景についての物語りは私が語らざるをえない（簡略に「風景を語る」と表す）．私と他者とは互いに持つアスペクト（あるいはゲシュタルト）が異なるので，互いに見ている風景も異なり，また，互いに語る物語りも異なっているが，お互いの物語りを語り合うことによって，物語りは皆のものである規範風景物語りとなって人々の行為（風景評価等）を規定する．なお，仮想市場での交換の成立は，系列Ⅱへの転換により風景が客観的对象となるだけでなく，同時に「価格表示された風景」にもなる．これは系列Ⅰに対応する．そして，数量的風景評価に即せば，私は，系列Ⅱで「この風景が安らぎの価値を持つことを知った」と語り，系列Ⅰで「この風景を維持するために作った基金への寄付を募った」と語る．ここまでの議論を整理し，簡略に図示したものが第 4 図である．長谷部（2012）で述べたごとく系列Ⅲは，系列Ⅰと系列Ⅱ及び両者の関係を照射する役割を担うが，これは風景物語り論の分析枠組みを導入する意義の一つである．

| | | | |
|-----|------|-----------|-------|
| 系列Ⅰ | 価格 | 価格表示の風景 | 風景を語る |
| 系列Ⅱ | 価値 | 安らぎの「風景」 | 風景を語る |
| 系列Ⅲ | 〈価値〉 | 私と一体化した風景 | 風景が語る |

第 4 図 系列Ⅰ，Ⅱ，Ⅲにおける風景及び物語りの性格

ところで、系列Ⅰの成立は、単純な価値形態が発展した最終段階に現れ商品全般の交換を可能とする貨幣の存在によっている。何故ならば、マルクスが指摘するようにいろいろな物が商品の体系（「巨大な商品の集まり」（マルクス（2009）71）の一員となるように成り立っているのが資本主義の経済社会であり、そのことを可能にしているのが商品となるすべての物の価値を表す一般的等価形物として固定された貨幣だからである。ここで、本稿で議論している仮想的に取引される風景を含めて、宇野弘蔵が説明するように「あらゆる商品が互いに交換されるためには、直接には交換されないで貨幣を媒介とせざるをえない」（宇野（1998）36）ことが価値形態論の重要な論点であることに留意したい。こうして貨幣の存在によって「安らぎの価値を持つ風景」（系列Ⅱ）と「価格表示された風景」（系列Ⅰ）とは同時に成立している。

本稿での議論をまとめる。西田の主客合一の論理のもとに設定された風景物語りの概念が数量的な風景評価に適用されると、風景は交換される商品のごとく扱われるために、それを語る物語りも「風景が語る」から「風景を語る」となり限定的な性格を持つことになる。また、私と他者とは異なるアスペクト（あるいはゲシュタルト）を持ち、互いが見ている風景は異なるために互いに語る物語りは異なる。しかし、お互いが自らの風景物語りを語り合うことによって共通の風景物語りである規範風景物語りを持つようになると、各人の行為（風景評価等）はそれに規定される。本稿での考察によれば、数量的な風景評価の適用によって他者や私と一体化していた風景が客観的な物語りとして語られることになる。つまり、風景の評価と言いながら客観的な眺めである景観の評価となっている。この自明ともいえる数量的な風景評価が持つ性格は、物語り論的な分析枠組み（Narrative approach）を導入すると、より明確に説明できることが本稿で示された。

最後に述べておくべきは、これまでの本稿の議論からわかるように、「風景が語る」という（対象と一体化した）視点からの風景評価に関する研究は課題として残されていることである。

- 注1) 長谷部（2012）では、今村仁司が『資本論』の科学は経済学批判であると同時に哲学批判であるという二重記述の性格を持つと述べていること（今村（2005）224-233）を総合的と言い換えた。
- 2) マルクスの価値形態論が、ヘーゲルの論理学やLWのアスペクト論と同様の論理形式であることは、川崎誠によって論じられている（川崎（2006））。しかし、これは、筆者がヘーゲル論理学に不案内なこともあり理解を超えているので、論究の仕方は本稿のような形をとった。
- 3) 風景の意味については、長谷部（1995）で主に内田（1993）を参照し説明した。
- 4) 以下は長谷部（2005）を一部修正したものである。なお、筆者は、この考察以降に長谷部（2009）などで物語りを言葉だけでなくからだ（身体）で聞き、語るという非言語行為を含め野家啓一の物語り論を拡大解釈したケースについても論じていて、その場合は言語行為に限定される野家の物語りと区別しく物語りと表記している。ただし、本稿は、言語行為のみを想定した議論である。
- 5) 第1図のもとになっている長谷部（2005）の図3で用いた「想起」は思い出しつつ語ることである。そのため長谷部（2005）の「想起しつつ語る」という表現は不適切なので、本稿では「思い出しつつ語る」と改めた。
- 6) アスペクト論については長谷部（1995）で述べた。
- 7) 本節の説明は長谷部・木谷・野村（2002）による。なお、木谷・長谷部・野村（1999）には、分析方法と分析結果の詳細な説明がある。
- 8) これは1回目のCVMの結果で、2回目のCVMでは日韓ともに支払意志額の増加という変化がみられる。
- 9) 塩沢（1983）でCは「生産者たち」として説明されているが、本稿ではCを一名の他者と想定して議論している。

- 10) この点に関して数学的な同値関係に基づき永田（2003）が論じており、本稿はこれを参考にした。同値関係は反射的、対称的かつ推移的な二項関係である。なお、長谷部（2012）では、マルクスの定式「20 エレのリンネル＝1 着の上着」が同値関係か否かについては検討していない。
- 11) 系列Ⅰ～系列Ⅲについての説明は長谷部（2012）による。長谷部（2012）においては、交換成立前の系列Ⅲに〈剰余価値〉を含めていた。しかし、剰余価値は交換を前提とした概念であるため、系列Ⅲの一要素とするのは不適切なこともあり、本稿ではこれに関する概念を系列Ⅰ、Ⅱ、Ⅲから削除した。
- 12) 「風景が語る」については、次の磯田光一による谷崎潤一郎『細雪』の解説を念頭に置いている。
- 「『細雪』に描かれている世界が豊かな生命を感じさせるのは、谷崎潤一郎という作家がこれを書いたにもかかわらず、じつはここに描かれている世界そのものが、谷崎の筆を通して自らの姿をあらわしたという印象を読者に強いるからではなかろうか。」（磯田（2015）498）
- 本稿では、文中の「『細雪』に描かれている世界」を風景世界と読み替えて「風景が語る」を理解している。

引用文献

- ダント, A. C. （2000）『物語としての歴史—歴史の分析哲学』（河本英夫訳）国文社。
- 長谷部正（1995）「田園風景認識の構図」『農業経済研究報告』No. 28, 29-44.
- 長谷部正（2005）「風景「物語り」を語ることの意義」『感性哲学』No. 5, 79-94.
- 長谷部正（2009）「農村の祭りにおける芸能と食の伝承—拡張版物語り論の適用可能性—」『2009 年度農業経済学会論文集』346-353.
- 長谷部正（2012）「『資本論』を経済理論として読むことの狭隘さに関して—価値形態論を巡って—」『農業経営研究』Vol. 50, No. 2, 37-42.
- 長谷部正（2019）「海外での農産物販売の経済哲学—村上春樹と神門善久の視点を参考に—」『農業経済研究報告』No. 50, 37-48.
- 長谷部正・木谷忍・野村希晶（2002）「農村風景の評価と条件不利地への直接支払い意識—日韓比較—」『2002 年度農業経済学会論文集』166-169.
- 長谷部正・木谷忍・野村希晶（2003）「物語りとしての農村風景とその評価」『2003 年度農業経済学会論文集』75-78.
- 今村仁司（2005）『マルクス入門 ちくま新書』筑摩書房。
- 磯田光一（2015）「『細雪』について」（谷崎潤一郎『細雪（下） 新潮文庫』新潮社）494-501.
- 川崎誠（2006）「等価形態の論理（上）—「簡単な等価形態」の論理（その2）—」『専修大学社会科学研究所月報』No. 511, 1-28.
- 鬼界彰夫（2011）「今こそ読むべきウィトゲンシュタイン」（『KAWADE 道の手帖 哲学入門 ウィトゲンシュタイン—没後 60 年、ほんとうに哲学するために—』）河出書房新社, 2-20.
- 木谷忍・長谷部正・野村希晶（1999）「農村風景の存在価値と評価の構造」『農業経済研究報告』No. 31, 69-88.
- マルクス, K. （2009）『資本論（1）』（岡崎次郎訳）大月書店。
- 永田聖二（2003）「同値関係と等価形態」『長崎大学社会科学論叢』第 63 号, 45-60.
- 西田幾多郎（2000）「論理と生命」（上田閑照編『西田幾多郎哲学論集Ⅱ 岩波文庫』岩波書店）173-300.
- 野家啓一（1993）『科学の解釈学』新曜社。

- 野家啓一（2005）『物語の哲学 岩波現代文庫』岩波書店.
- 野村希晶・木谷忍・長谷部正（2001）「PC ナビゲート型調査システムによる仮想市場評価法の試み」『日本建築学会技術報告論集』No. 12, 219-222.
- 野矢茂樹（2012）『心と他者 中公文庫』中央公論新社.
- 大橋良介（1995）『西田哲学の世界—あるいは哲学の展開』筑摩書房.
- 大森荘蔵（1994）『知の構築とその呪縛 ちくま学芸文庫』筑摩書房.
- 大森荘蔵（1996）『時は流れず』青土社.
- 塩沢由典（1983）「マルクスの搾取理論」（『近代経済学の反省』第2章第6節, 日本経済新聞社）219-288.
- 田島正樹（2012）「解説」（野矢茂樹『心と他者 中公文庫』中央公論新社）.
- 内田芳明（1993）『風景とは何か 構想力としての都市 朝日選書』朝日新聞社.
- 宇野弘蔵（1998）『資本論入門 講談社学芸文庫』講談社.
- ウィトゲンシュタイン, L.（1991）『ウィトゲンシュタイン全集第8巻 哲学探究』（藤本隆志訳）大修館書店.

付記：本稿は、2015年3月20日の東北大学大学院農学研究科の最終講義のために準備した原稿に加筆修正したものである。